



まちづくり会議 2011 @ 東京 ふくい南青山 291 2011年2月13日(日)



【第一部】

パネリストと地域紹介

道田：本日のために、日本全国から参加してくださいました皆さま、ありがとうございます！まずは司会進行を務める、私達へまちづくり会議実行委員会へについて簡単にお話します。福井県高浜町では、ここにいる道田、並河、のかたのほかにも、計10名の様々なプロフェッショナルが、2006年から、外部アドバイザーとして活動しています。

このまちづくり会議2011では、町づくりに取り組んでおられる先輩方（青森県八戸市、長野県小布施、福井県鯖江市、大分県由布院温泉）に、成功例や共通課題を伺いながら、私達自身が学ぶと同時に、これから町づくりをはじめようという方へのヒントを紡いでいく場になればと思い企画をしました。それでは最初に、コピーライターの並河さんが「まちづくり会議の心得」を書いてくれたので、その発表からはじめたいと思います。

並河：

- ・まちづくりをやっている人、これからやろうとしている人による会議です。
- ・よいところは盗みあい、うまくいかないところは、一緒に考える会議です。
- ・町を愛する人達がその愛を持ち寄って、お互いに自慢しあう会議です。
- ・難しい話だけでなく、美味しいものを食べたり、なんていう楽しい会議です。

人の話を聞きたい」と言っていたら、のかたさんが「日本には熱いまちづくり人がたくさんいる。個性的な取り組みを懸命に楽しそうにやっている」という話をしてくれました。そこで本日もみなさんに、北は八戸から小布施、鯖江、高浜、由布院まで、できるだけ日本全国からお集りいただきました。では、のかたさんに、熱いまちづくり人を紹介してもらいます。

のかた：こんにちは！まちづくりびと案内人の、のかたあきこです。全国の町と温泉めぐりながら、地域の人にお話を伺い、本づくりをしています。今日は私が旅先で出会いました、とっても素敵な「まちづくりびと」に町のこと、まちづくりのことを教えて頂くと思っております。

トップバッターは、青森県八戸市から、八戸せんべい汁研究所所長の田村暢英さん、同じく研究所の所員であり、フリーキャスターでもある中島美華さんです。B級グルメは社会現象になっていますが、第五回のB-1グランプリは2010年神奈川県厚木で開催されて、43万5000人という来場者で賑わいました。相当な経済効果をもたらしたし、ニュースでも多く取り上げられたので、ご存知の方も多くいらっしゃると思います。ですが、その第一回が開催されたのが八戸であることは意外と知られていません。このお二人をはじめとする八戸せんべい汁研究所のみなさんがイベントを立ち上げました。では、どんなまちづくりをなさっているのか教えてください。

田村：2002年12月1日、八戸に新幹線が参りました。注目される千載一遇の機会を逃してはいけません。当時、八戸地域地産産業振興センターに勤務していた木村聡さんといういる考えて、八戸発祥の南部せんべい、食べる南部せんべいではなくて、料理用の南部

・まちづくりで頑張る人をもっとしてもらいたいと願う会議です。

道田：議事進行の助っ人として、広い知識と視野をお持ちのゲスト二人をお招きしました。最初にご紹介するのは、三菱地所エコツェリア協会の平本真樹さんです。

平本：三菱地所というビルやマンションを造っている会社、というイメージがあるかと思いますが。それは間違いないのですが、逆に造ったものをどう活性化しようかということでも、もう一個肩書がありまして、エコツェリア協会という名前でも活動をしています。一部、メディアによく取り上げていただいているのが、「丸の内朝大学」という、仕事の前に7時半〜8時半まで集まっていた丸の内周辺でいろんな学びをしている市民講座があります。こちらは大人気でいつもキャンセル待ちです。いろんな人をいろんな得意分野でつないで、我々の地域だけではなく外のエリアという関係をつくりながら丸の内を元気にしていく、そして丸の内の元気を、関わっているみなさんにお戻りする、というような取り組みをしています。

道田：もう一人のゲスト、家守公室代表の小松俊昭さんです。

小松：元々たいへん堅い日本政策投資銀行というところの銀行マンでした。今、家守公室というところの代表をしておりますが、本職は金沢工業大学で産学連携のコーディネートをしています。副業で家守公室という、いわゆるエリアマネージメントの仕事をしています。私自身は何を一番得意にしているかというと、仕掛けとか仕組みの作り方です。あとお金を回すのは得意。ですからなるべくお金をどううまく回すかということについて、みなさんと語り合いたいと思っています。

道田：この会議のそもそもの切っ掛けですが、「全国のまちづくり

せんべいというのがありまして、これを使って、せんべい汁をPRすることにしました。中島：せんべい汁の美味しさを多くの人に伝えるためにはどうしたらいいだろうと考えてたら、全国には「食」で町おこしをしている人がたくさんいるということを知ったのです。それなら、そういう人たちが集まってイベントをやれば全国に注目されるかも、ということで開催を決めたのがB-1グランプリです。正式名は「B級ご当地グルメの祭典！B-1グランプリ」です。そして2009年2月18日・19日、雪降る中、九州からも来ていただきました。最初は10団体、八戸市の八食センターで開催しました。人が来るかどうか分からないままに開催したんですけど、来場者1万7000人でした。正直、一番になることが目的ではありません。ここで自分の地域をPRするというのが目的です。でも順位を決めないとマスコミに注目していただけないので、著の重さで順位を決めるスタイルをとっています。

のかた：八戸は夜のネオン街も朝市も朝銭湯も楽しいので、みなさん、おでかけの際はぜひ泊まってもらえたらと思います！

では2番目、大分県は由布院から、由布院観光協会のメンバーである西原慎一郎さんと、元ミス由布院の奥さま、西原郁子さんです。由布院は「まちづくり」という言葉がまだ一般的でない1970年代から旅館の男たちがまちづくりを始めていますが、今ではそれが成熟して第二世代、第三世代へとつながっています。その第二世代の中心であるお二人に楽しいイベントの話や由布院の魅力などを語っていただきたいと思います。

西原（慎）：私は北九州で生まれ、大学を卒業して家具を販売する仕事に就いたんですが、小さなころから「ものづくり」が大好きで、売る側よりもつくる側に回りたいという気持ちのポルテージが



上がっていました。そんな中、由布院温泉観光協会で、「木工を通してまぢづくりに貢献できる人を募集します」という記事が新聞に出されていたのを見て、「あ、これだ!」と思ったのです。

お願いして受け入れていただいた「アトリエとき」は、師匠である時松辰夫が、地域のための仕事を、つまり

町の出事 II 仕事

だよ、という考えでした。修行時代の約5年間は、町のイベントにずっと出突っ張りでした。そういう生活の中で由布院のたくさんの人と知り合うことができて、市役所だとか旅館、農家の人、料理人、製造業の人、いろんな人と知り合いました。

2年前に私は独立し箸屋を始めましたが、人とのつながりがいけばん大切な、と今も実感しています。時々町のおいちゃんから電話がかかってくる、庭木を切ったから取りに来いとか、道路工事で桜の木が引っ掛かっているから後で持っていくよとか、たくさん雑木がうちに集まっています。実際に使われている製品の八割は、そういった切られた木を利用しています。

よく師匠が私に言っていたのが、「雑木や廃材を利用してもう一度それを命を吹き込んであげる」と。人と社会と自然はすべてつながっているんだという環境がここ由布院にはあるんだよ。出ごとII仕事という環境が、今の私を支えてくれていると思います。一番のイベントの収穫は妻と出会ったということなんですけど(笑)。

郁子：私は由布院で行われているほとんどのイベントの司会をさせてもらっています。子供の頃からなんにもない由布院が嫌い、大学進学という形で由布院を飛び出し、あこがれの都会・福岡に移り住んでいましたが、ある時、ものすごく寂しく感じてきたんです。星が見えないとか、空の様子がわからないとか、由布院は雲の流れで「明日晴れるよ」というのがわかるような町ですから、心の中で何かが埋まらないままま過ぎて、仕事に就きました。その年の

こに熱い男たちが、ものづくりの原点を振り返り、鯖江のめがねづくりの、過去・現在・未来をつなげる仕事をしていこうじゃないかということでも立ち上がりました。

浜田：僕たち二人は県外出身者で、僕は京都生まれの大阪育ちです。大手メーカーで企画開発の仕事をしてきました。大手で主流の大量生産、大量販売、「安くいいもの」というものづくりに嫌気を感じ、退社しました。今から十年前に、ホンモノの、究極のものづくりがしたいということ、妻の実家がサングラスメーカーをしていた鯖江に移住してきました。鯖江という町ですが、地元の人あまり感じてないかもしれないですが、すごい産業がたくさんあります。まず繊維、それから越前漆器。これは1500年の歴史があって、しかも日本の業務用シエアを入れると70%以上のシエアを誇る産業です。そしてメガネ。日本では60%以上のシエアがありますが、世界でも30%ぐらいはありまして、しかも100年以上の歴史を誇る町です。

移住した10年前から客観的に鯖江のものづくりを見てきました。当時、職人さんたちやメガネ工場の人たちの話を聞くと、あまり自分たちの仕事に誇りを持っていなかったというか、いかに効率よく、速く安いものづくりをするかという生産方法を目指していたように思います。

僕はその時に、鯖江の熟練職人さんたちに、あなたたちの手間がかかってちょっとしか作れず、しかも高いその商品というのは実は世界に誇れるメガネだと、説明することから始めました。で、5年の歳月を経てやっと、彼らの技術を盛り込んだ究極のメガネブランドを立ち上げることができました。

僕はその時に、鯖江の熟練職人さんたちに、あなたたちの手間がかかってちょっとしか作れず、しかも高いその商品というのは実は世界に誇れるメガネだと、説明することから始めました。で、5年の歳月を経てやっと、彼らの技術を盛り込んだ究極のメガネブランドを立ち上げることができました。

夏に帰ることがあり、ちょうど由布院映画祭という、もう35年ほど続いている映画祭の前夜祭の準備をしているところでした。由布院の映画祭って「映画館のない町で映画祭をやる」というコンセプトなんです。その前夜祭では、駅前道路を封鎖して、駅に大きなスクリーンをはって、会場づくりをします。それを見た時に、若い人たちが動き回っている姿にわくわくしてきちゃって、仕事をやめて由布院に帰ろうと決めました。

由布院にはイベントやお祭りが沢山ありましたので、どんどん顔をだし、いろいろなところから私はスタートしました。で、どっぶりその生活に入っていくと、面白いぐらいに町の中の人たちと繋がっていいけるんですね。

と呼ばれたお金のない地域の人たちが、お金がないからこそ知恵を出し合って生きてきた、というような町です。自分たちの好きなことをこの町でやってみようというのが基本コンセプトの中にあって、「この町に子どもは残るか」というのを行政の人だったり観光、商工の人だったり農業の人だったりいろいろな人が話し合いながらまちづくりを進めてきました。なので、私たちもこれから、次世代の子どもたちに残していけるものを探していかなければいけない時にきているんじゃないかと思っています。

のかた：由布院は土産物店が並ぶメイン通りよりも一本裏手の小川沿いが、私は好きです。モンシロチョウとかアメンボとか、すごく懐かしいものに出会ったりするので、おでかけの際は、ぜひ自転車とか、歩いたりして、町を散策してみてください。

では三番目、メガネの町・福井県鯖江市からプロスジャパンの浜田謙さんと、乾レンズの諸井晴彦さんです。鯖江はメガネづくりで100年以上の歴史があり、フレームづくりに関しては世界シエアを誇るすごいところなんです。しかし時代の波やスピード化にはやっぱり逆らえず、最近はいくぶん元気がなくなりつつあるのかも。そとくにメガネなんかは中国市場にやられてほぼ壊滅状態で衰退しているというのが状況です。

僕の最終的な目標というのは、

ホンモノのものづくりができる職人さんといふのが、ちゃんと稼げて、ちゃんと跡継ぎができて、ちゃんとその技術を後世に残していけるっていうことが大事

だと思っています。今後はこれをもっと横に広げていって、活性させていけたらなと思っています。

諸井：私は、日本唯一のサングラスレンズの専一筋、乾レンズから来ました。元々私は静岡の袋井市出身でして、大阪の大学を卒業後、ふるさとの企業であります自動車のスズキ株式会社就職して、大阪のだんじりや有名な岸和田市の近くで自動車のセールスを8年続けてまいりました。その後、乾レンズに就職しました。理由は娘婿だということです。

私は現在業界14年目ですが、今年で109年目の鯖江のメガネづくりに疑問をもっています。果たしてこのまま次世代に胸をはってこの産業を残すことができるのか。そして新しい次の100年を我々は築くことができるのだろうか。鯖江のものづくりは効率よくたくさん作り、技術を競い合うことで成り立っており、それを支える内職のような小規模の下請け工場が多くあります。様々なテクニクを持つ外注工場があるから、メガネの町として100年も君臨できました。ただ、他の地場産業がそうであるように、下請け工場としては素晴らしいけども、商品を企画して、自社で生産・販売をする工場は、ほんのひと握りなんです。同じものができるとすれば、生産コストの安い海外に生産拠点を移されてしまうのは当然のことです。下請け工場であるがゆえに、販売することを他社にゆだねるメ



ガネ産業の我々は、買っていただくお客様の顔が見えないまま製品をつくっております。売れるか売れないか、なんて関係ありません。発注者の支持者通りにつくるだけです。自社の製品をどんな人が買って行くんだらう、そんな小さな情報さえフィードバックされてこないのが現状なんです。

そんな私が入れて活動しているのは、ギフト組です。ギフト組はこれからの鯖江のメガネ産業を担っていく、福井県の眼鏡工業組合青年部の経営指導力委員会のメンバーを中心に構成されています。定義は「眼鏡の街・鯖江」にどっぷり属しながら、あえて眼鏡を創らず、

眼鏡で培った技術を 次の世代のために残すことを第一

に、大好きな人にプレゼントするもの(ギフト)を想像できる企業になるうとする若き経営者集団」です。図面通りにきちんとつくることを美徳としていたものづくりから、買っていただいた方が喜んでお金をしてくれるものづくりをしましょう、という委員会です。鯖江のものづくりの楽しさを次の世代に残すために活動していると思っています。

のかた・贈る人のこと、メガネをしている人のことを思い、ものづくりをして、自分たちの生活も維持できているというのは本当に幸せなことだと思います。これからそういうふうな日本にまたなっというて欲しいなと思います。

では四番目、長野県小布施町です。小布施町というと、まちづくりでは今一番注目度が高く、視察も多く、長野市から電車で20分くらいのところにある、ほんとに小さな町です。しかし、その小さな町に詰まっている歴史と人とモノとアイデアはもの凄いものがあります。その中で今大人気の町立図書館「まちとしょテラソ」の館長

の花井裕一郎さんと、おぶせくりちゃんという、ツイッターで大注目の町公式キャラクターのご紹介を、小布施町役場の高野慎一郎さんにお話いただきます。

花井：私は小布施とはゆかりもない福岡県の筑豊地区の出身です。私が館長を勤める図書館「まちとしょテラソ」は、エントランスを入りますと、あとは全てワンルームになっています。この図書館をどういうふうにつくったかというのが僕らの活動の一番のポイントで、町民、一部町外の方と、いっしょに約二年間、議論をしました。やっぱりキーワードは「子供」、っていうのはすごく大きかったです。どんな図書館がこの町にあったら子どもたちや私たちが、どのくらい楽しく過ごせるのか？っていうのが僕らの議論の内容だったと思います。

小布施のまちづくりは「まず町民が楽しくなければいけない」、これは町長の言葉ですけど、結果的に観光地になったというので、実際は町民のためにどれくらい汗をかくことができるかが重要です。延床1000平米の中に本とテーブルを並べただけですが、この中で様々な試みをやっています。いつも、子どもたちが楽しそうにソファの上で本を読んでいます。たぶん世界一うるさい図書館だと思っています(笑)。大人も子どもも一緒の空間で育っていく。理念が「交流と想像を楽しむ文化の拠点」とあるんですが、そこから抽出したキーワードが「わくわく」なんです。

わくわくするために 何をしたらいいかっていうのを 僕たちが演出

して、それをいい意味で裏切ったり、何かを提案したりしている時に、子どもと大人達のわくわく度をほとんど引き出しているんじゃないかと。それがまちづくりで叶えられることじゃないかなと

思っています。

図書館法という法律があるのですが、図書館ってだいたいみなさん本を借りるところ、受験勉強するところ、と思われている方が多いと思います。しかし、この法律にはそうじゃないことがたくさん書いてあります。講演会をしないとか上映会をしないとか、すぐレクリエーションに則した交流的なものをしなさいと書いてあるんです。そういうふう理解していただければこの図書館が目指すべきところを理解していただけるのかなと思います。

高野：私は、今ツイッターで話題になっている「おぶせくりちゃん」についてお話させていただきたいのですが、おぶせくりちゃんは、今日は恥ずかしくて来られないということなので、上司の私が代わりにお話させていただきます。

様々なまちづくりの取り組みを、情報発信したいと思っています。すでに自治体のツイッターはあったんですが、どこも、まじめ、かたい、おもしろくない、それから情報発信が一方的なんです。今日こういったイベントがあります、こういうことやっています、つまりその反対にはリプライしてくれないので、フォロアーが少ないんです。これを払拭しないとだめだなあとということで、なんとかできないかと考えました。

私が所属しているのは行政改革グループといいます。堅いイメージをかえたいと参考にしたのが、米子市のキャラクターのネギ太です。小布施も、普通の自治体のツイッターじゃないものをやりたい。ということで考えたのが、小布施のコミゼロリサイクル促進キャラクター「リサイくりちゃん」です。リサイクルと票をかけてリサイくりちゃん。そんなに活躍してなかったので、彼に非公式なだけどツイッターでつぶやいてくれないかってお願いしたんですね。したら彼が、「わかったくり」といってツイッターを始めてくれたんです。その彼が、今はよくつぶやいてくれる(笑)。ツイッターというのは「なっ」といいますけれども、「おぶせなっ」って言う

たらそれに対して答えてくれますし、寝ます、といったら「おやすみくり」と答え、どこかいいお店ない？と尋ねたらそれにも答えてくれる。たいへんよくつぶやいてくれるんですね。

彼は2010年4月からつぶやいているんですが、ツイッターやっている人なら驚異的な数字だということがわかると思うんですが、一日平均200ツイート。最高ツイート588ツイート。フォロアーとフォロアーが400人以上。これは自治体としてはネギ太に次いで2番目くらいじゃないかと思えます。あと特徴が、コミュニケーション率が84%。これも驚異的だと思います。とにかく、

ツイッターを通じて 相手とコミュニケーションする

んですね。

こうした彼のがんばりに対して、グッズはないのか、小布施に行つてリサイくりちゃんに会いたいという人が増えてきて困りました。キャラクター的に手足がなかったので、着ぐるみにしても歩かせません、そこで手と足を生やして、「おぶせくりちゃん」としました。この機会に小布施の名前を付けて、町の公式キャラクターとしてHPで堂々とつぶやくと。新聞にも取り上げられまして現在に至っています。

のかた・ありがとうございました。みなさん小布施というキーワードを絡めてツイッターでつぶやいてみてください。例えば「どうせ小布施のpotだろ」ってつぶやくと、おぶせくりちゃんからきつと「ポットじゃないくり」と返ってきますよ！

まちづくり会議の前半戦、すでに熱いですね(笑)。いよいよ最後になりました、福井県の高浜町から建築家の道田淳さんと、電通



のコピーライターの並河進さんです。高浜町は福井県の西の玄関口です。本当に海のきれいな町で、それこそ昔は小布施に負けなくらい100万人の観光客が海水浴に来ていました。その自然の美しさを見直して、まちづくりをはじめようということで、男たちが立ちあげました。

道田：今日は高浜町役場の方、高浜ドッグをつくるために商工会さん、たかま鮎をつくるお寿司屋さん、お手伝いで町民の方にも来てもらっていますが、私たち、まちづくりアドバイザー全員は町外者です。ことの始まりは高浜町にある古い国民宿舎の改修計画の相談から始まっています。私は、美術館や旅館をやった経験から、ハードウエアというのはソフトウェアが充実していないと活用できないということを実感していました。そこで建築をやる前にやること、もっとあるはずだと提案したのです。とくに観光地の場合は「しつらえ」にあたる施設ができたとしても、料理とかサービスといった「もてなし」の部分がしっかりしないと絶対、お客さんの滞留時間が長くなり、楽しんでもらえません。

当初から、私の技能だけで町を相手にするのは無理だと思っていたので、まず考えを周りの人に伝えていって仲間を増やそうと、隣にいるコピーライターの並河さんを引き込み、次にアートディレクター、カメラマンと仲間を増やしてきました。

活動のいくつかを紹介しますと、ポスターやパンフレットを作ったりして、できるだけ町外の人に美しい高浜町を知ってもらおう広報活動をしています。外の人が関心を持って、こういうところから高浜町の人に誇りが出てくるんじゃないか思っています。また福井県に限らず、地方に行きますと放置竹林の問題があります。地元の皆さんと伐採整備して、そこに京都からスペシャリストを呼んで、知識と技術を加え、ブランド化をしていく活動をしています。資材だった竹を資産に変わるようにしたいのです。そして、このあとの懇親会でふるまうのが、1300年の歴史を持つたかま寿司です。こ

全国の同じような課題がいっぱいあるんですね。そういうところを住民の人たちを集めて、一緒に考えていくような集いや活動もしています。具体的にそういう活動の一つとして、国民宿舎をどう復活させるか。すぐ近くに漁港があるんですけど、漁業関係者の皆さんも、魚を売るとか買うとか見るとか、そういうことを積極的にやりませんか。海の男たちと一緒に酒呑み、わいわい町についてしゃべって最後は記念撮影する(笑)。そういうこともやっています。

並河：青の里地球まるごと会議っていう、これは町の人たちが中心になってNPO的な活動をしている団体のお手伝いをしています。去年、シーズアースデーっていうイベントが秋に行われました。屋外で映画を上映して、ガイアシンフォニーっていう有名な環境映画を観ました。この町には映画館がないので町の人みんな集まって来て、映画っていいですね。みんなであっつと盛り上がったたり。僕が白宣言を始めた時は気付かなかったんですが、だんだん町のことを知るに従って、この町で町が好きで何かやるうと思っている人たちが、5人とか10人とかの団体がたくさんあって、そういう団体が白宣言を掲げたことで「僕らはこういうことを考えている」という声がある出る出てきて、そういう動きを束ねて応援していけたらなって、僕の気持も変わりつつあります。

れもブランド力をあげていくために、食のスペシャリストや料理研究家に助けてもらって、歌舞伎の公演が来た時には幕間弁当を販売したり、商品化を進めるなど様々な活動をしています。こういった多くのメンバーで、やれる分野は全部手をつけていこうと現在取り組んでいます。

並河：僕は高浜町に住んでいる人間でも、出身者でもないのが最初は結構悩んで、いろいろ道田さんに相談していました。あるとき、まちづくりのキッカケを提示して旗を振るくらいのことではできないかと思っただけです。最初に役場の人と話したんですが、この町には名物として打ち出していくべきものがなかなかなくてそれを今探しているところなんです、という話がありました。しかし町に行く、すごくきれいな浜がそこにあります。でも歩いていく人はそんなになくて、町の中にいる人は自分たちのいいところになかなか気付けないのかな、と感じたのです。で、最初に「高浜白宣言」というものをつくりました。「白」という言葉に込めたのは、浜の白さと、いろいろ悩むんじゃないやなくてもう一度真っ白な気持ちで自分たちの町の良さを見直してみようよ、ということなんです。

道田：高浜町は高度成長期のころに海水浴で有名になった町で、八つのきれいな浜があります。私たちの最初の活動は、これらの浜へ愛情を注いでもらうことから始めました。美しい浜をみて外から来た人が喜んでいても、町の人が「私たちが、この浜をきれいにしている」という誇りがないとダメです。浜掃除、と呼ぶと響きがよくないので、浜のゴミをひろいながら町への愛情もひろうっていう意味で「浜ひろい」と呼んでいます。これは今月2回、継続中です。

あと観光地としても復活させたいのですが、もっと住みよい町にしたいためにはどうしたらいいかなんてことにも取り組んでいます。中心市街地にだんだん人がなくなってきた、シャッター商店街みたいになっていくのをどう盛り上げていけばいいのかなとか、日本

【第二部】

ディスプレイション

道田：今日は、全国からパネルーにお越し頂いています、どうして皆さんをお呼びしたのかを、ちょっとお話しします。

まずは八戸ですが、ご存知の通り、食文化とソウルフードで町おこしをしていてこれだけ有名になりました。とくに初期のとりくみ話を聞いていると、ああやっぱり大変だったんだな、「俺達もがんばろう」と思える話が多々あったので、ぜひその

食文化とソウルフードに懸ける気持ち

を多くの人と共有したいと思ったのです。高浜町では1300年前に生まれた「若狭たかま鮎」をこれからなんとか外に広めていきたいと思っているところなので、何かいいヒントがあれば聞きたいとも思いました。

二番目に登場してもらった由布院ですが、ここは有名な旅館がいっぱいありますし、町づくりがすごく成功しているっていうのは、昔から知っていました。普通は町づくりを始める時に、思いを広く伝えて一緒に動いてくれる人を集めるのが大変ですが、この町はすでに、その次の段階である、

新しい世代に脈々とまちづくりが継承

されています。広げることで精一杯なのに、それを繋げ、継ぎ、どんどん後世に伝えている。この町に住んでいる人は、どういう気持ちでまちづくりをしているんだろうと聞きたくなったのです。



三番目は同じ福井県の鯖江ですが、一般的に活動を始めていくには、趣旨に賛同する仲間が集まり、そして運営資金が必要になります。持ち出しやったり、カンパでやったり、志の維持とともに活動の維持には大変なことがいっぱいあります。でも、鯖江の場合は、メガネを中心にした地場産業がイキイキしているっていうことが、何より地域の生活を支え、歴史文化を維持することに繋がっているように思います。まず

地場産業がちゃんとしている ということが大事

なのかもしれない。そういった気持ちから、話を聞きたいと思いました。

四番目の小布施についてですが、町の人口が高浜町と同じ1万1千人くらいの町です。高浜町では高度成長期に一夏150万人といわれたほど沢山の人が泊まりがけで海水浴に来ていましたが、今は20万人近くになり、しかもコンビニに寄って砂浜にテント張って帰るだけで、浜辺や地元にお金を落としません。

一方、小布施の場合は町並みの景観保全事業の維持、特産品の粟を盛り上げ、イベントを仕掛けたり、と

多面的な活動の成果として、 100万人を超える観光客

が来ています。100万人が来て、滞留時間も長く、町の中でちゃんと楽しみ、喜んで帰られる。おぶせくりちゃんなんか見ているとほんとに老舗旅館みたいな丁寧なやりとりをしています(笑)。こういった気持ちでまちづくりに取り組んでいる方のモチベーション

常に重要なことで、そのクリエイトする喜びっていうのが町づくりの中には必ず含まれていると思いますから、そのあたり「時」と「伝統」が二つ揃っていると、

「楽しい」とか「わくわく」っていうことを 実感しながら町づくりが続けられる

と思っています。

平本：キーワードは「続ける」っていうことなのかなと。僕の中で大きく感じたのは、「人」と「仕組み」だろうと。そこで自分なりに「人で五つ」、「仕組み」で三つのキーワードをあげました。

まず「人」の一つ目、「自慢しよう」。まず自分たちの誇りですね。どこにあるか。次は「出会う」。やりたい人とやらせたい人のマッチングですね。やりたい人だけじゃダメで、それをやらせたいと思う人とどう出会うか。それは個人個人でもいいですし、個人と自治体でも、組織とでもいいです。そのこのマッチングって進化する、さっきの「誇り」を進化させるっていうのが一つのきっかけかなと思いましたが。その次はそのマッチングを加速するために、「つながる」。「場としての交流」が必要だと思っですね。それから実はツイッターのコミュニケーション率みたいな話っていうのもそうで、交流で自分たちが何をやっているのか、何をやりたいのか、あなたは何をやらせたいの、というような交流が必要かなと。で、そんな場ができたところで、みんなで共感できるものを作る、「伝え合おう」。みんなで共有・共感できるキーワードだったりキャラクターだったり、きちんとして作るの大事だなと思います。で、この次が実は肝心で、自分たちがやりたいことをやるために、「巻き込む」。自分たち以外の人をどう巻き込むか。これはまさにB1のやり方がヒントになるかなと。自分たちをPRする時に自分たちだけをPRしても、関心がある人は乗ってくるんですけど、それ以外でぜんぜん

を聞きたいと思って今回お願いをしました。

では、まずはゲストのお二人に、前半の話を聞いた上での感想や意見をお聞きしながら、後半のディスカッションを始めたいと思います。

小松：「時」をキーワードにお話しをさせていただきます。由布院は中谷さん・溝口さんたちが、50年とか100年とか、こういうことをドイツから学んできて、「時」を考えたいわけですね。八戸っていうのはおそらく縄文の世界から脈々ときていますね。縄文時代という「時」を今日まで刻んでいるわけですね。小布施は江戸期からですね。葛飾北斎さんが江戸でなんとなく鬱々としていた時に高井鴻山さんが呼びよせて、その末裔の市村さんたちが今、小布施を脈々と継承している。鯖江と高浜は、まさにゲートウェイですよ。大陸とのゲートウェイとして、皆さんを迎えて京都に伝えると。今日来られた地域の人たちはあらゆる「時」を刻まれているということ、その担い手、継承者なんですね。

「町づくりは駅伝なり」

と。なんで駅伝かっていうと、それぞれタスキを背負っているんですね。地域のタスキをしょってまして、そのタスキを誰がどう次の世界に残せるかというのが一番の勝負どころだと思っています。そのためにはやはり仕組みを作らなければいけないです。もちろん、楽しみながらというのが最低限の要素なんですけど、自分の役割というのが常にあると。ですからどんな小さなことでも、タスキを次の方へ託すためには大切なことです。

それともう一つは、「伝統」という言葉です。伝統っていうのは因数分解すると「伝承」+「創造」です。ですから町づくりも、過去から引き継いだものをしっかりと次の世界に引き継ぐことと、必ずクリエイトをするんですね。ですから「わくわく」っていうのが非

ん乗ってこないんですね。でも一緒にやろうとか、そういうことで巻き込んでしまえば、その人たちが勝手に自分で八戸のことや高浜のことを紹介してくれたりするかと思えますし、上の、一見邪魔と思える人たちも、何か応援団にする仕組みっていうふうには、役割を与えてあげれば、その人たちが自然と巻き込まれていくんですね。その役割をきちんと作ってあげること自分たちがやれることをやっています。

それから「仕組み」で三つ。一つは「第三者的な視点」。今日のお話しても、地元じゃない方たちが町づくりに関わるとか、地元を一回離れた方が戻られたりとか、地元以外で活躍して評価されてそれが地元の役に立ったりとか。自分がどっぷり浸かっているように、客観的な視点を持っている人の価値観っていうのが気づきのキッカケになると思っですね。あとは今日、意外と出なかつたんですけど、浜田さんからあった「ブランディング」。僕の中では「価値のコントロール」っていう言い換えをしています。ブランディングっていうとちょっと高いものを高く売るといような間違ったいメージがあると思っんですけど、自分たちが大事にしたい価値をどこに置いて、誰と共感するかっていう価値のコントロールですね。あともう一つが、続けることの大事なことで、「仕組み作り」。人材をどう使うか、知恵をどう使うか、花井さんが出された法律の話、制度をどう使うか、そこをうまく組み合わせることで、町づくりを続ける仕組み作りですね。仕組みっていうと、とりあえず誰とどういう場で語り合おうみたいな話だけで終わっちゃうんですが、そこを例えば制度論だったり、お金、先ほどの時間軸、に乗せて考えることが必要かなと思います。

道田：では、ここで事前に観覧申し込みいただいた参加者の中から、質問が届いていますので、ざっと読みあげてみます。

「会った人を引き込む次の一歩とはなんですか？」



「繋がりを楽しくむにはどうしたらいいですか？」

「今後町づくりに関してどんな考え方があっていいのでしょうか。」

「この田舎でも見る画一的な風景、国道沿いの大型店舗…」

「シャッター商店街が復活すればいいとは思いますが、」

「もっと誇りと地域性のある町づくりをするためには」

「どうしたらいいのでしょうか？」

「アイデアの生み出し方、周りをうまく巻き込む方法は？」

「仲間、あるいは理解者の集め方のコツは？」

「地域活性化とアートの力についてはどう考えられていますか？」

「居心地の良さが町づくりの基本であるとは思いますが、」

「数字にはなかなか表れないと思います。」

町づくりを試みる際のゴール設定についてはどう考えていますか？」

「今、お話を聞いていた中で、平本さんの「出会おう」とか「つなごう」という話がありました、皆さん」

どうやって周りを巻き込むか

とか、そこを気にされている方が沢山おられます。田村さん、最初はどうやって人を巻き込んでいったのか？そのへんを体験交えて話をしてもらえませんか。

田村：八戸せんべい汁研究所はどうやってここまで成功したのかってよく言われるんですけど、「いつの間にかこうなった」としか言えないんですね。今日のパネラーの皆さんは八戸以外の方は、よそ者の方がやってらっしゃるなど。

私はよそ者ではないんですけど、

かった木村さんという人が、一人で「せんべい汁、せんべい汁」と叫んでいた時に出会っているんです。私は地元のテレビ・ラジオでリポートしたり司会をしたり歌を歌ったりというタレント業をしているんですけど、自分のラジオ番組に、せんべい汁をやっている彼がゲスト出演するっていう。ラジオで「せんべい汁」ってしゃべったら、津軽地区から「きもちわるい」「食べたくない」「なぜせんべい汁を入れるの」って非難ごうごうのメッセージが届いたわけですよ（笑）。「なにいろ？」と思って、どれだけ説明しても、せんべい汁を食べたことがない人にはわからねえわけです。どうすればいいんだらうって、じゃ食べてもらおう活動をする市民団体が立ち上げようって。私はどうすれば伝わるんだらうって歌を作る。歌だと子どもが聴くと続けて親が聴く、ダンスがあればみんな踊る、そうやって繋がっていくんですよ。せんべい汁研究所のメンバーを、木村さんが中心になってみんなに声をかけられました。それぞれ商標登録の件があるから井理士さん、コンピュータのことはコンピュータの会社の人、経理が強いのはこの人、って、全員に全部の役割を求めるとなると、全体を作った時に

それぞれの役割で 何か知恵を貸してくれそうなお酒、 それこそお酒が好きで食べるのが好きで 八戸が好きという人

がどんどん集まってきた感じがしますね。

花井：僕は小布施に住んで10年目ぐらいです。元はテレビのディレクターをされていて、撮影で小布施に行き、そこで面白い人たちに出会って町を好きになった。先ほどから皆さんお話しされていた、どうやって仲間になって町づくりに関わっていくかを見てみると、入ってこない人っていいのはだいたい文句ばかり言っているんです

ばか者なんですね。

南部せんべいのことしゃべらせると、2時間も3時間もしゃべっている。そしたらたまたまそういう男がもう一人いた。出会ったときか言いようがないですね。その次に、私たちはこのせんべい食文化をPRして、最終的には商売に繋げるんですけど、「八戸に来て泊まってお金を落としてください」ということを、誰に頼まれるでもなくやっているわけです。そうすればそれが波及する。結局、

巻き込むためにはギブ&ギブしかない

のかなあと。とにかく熱意と誠意で一所懸命相手に接する、それで八戸を好きになってもらおうということ。それから、この人ならやってくれるんじゃない、とか、この人なら絶対来るね、という第六感。逆に私は、他はどうなんですかって聞きたい。

道田：そこはまったく同感ですね。僕らの周りには、ほとんど仲間。今となっては同志に近いんですけど。最初は「おもしろい町づくりやらへん？」とか言いながら、次に、「コピー書かへん？町づくり人のインタビューだけやなくて、まちづくりに活かしてみない？とか口説いて、その延長でみんな参加してくれました。熱意と誠意、それは絶対必要だと思います。」

田村：それこそ一緒に

酒を飲んでいて面白い

ということですよ。隣にいる美華さんは、お酒は飲まないんですけど、面白いんです（笑）。

中島：せんべい汁研究所ができる前から、今日残念ながら来られな

よ（笑）。あれはこうすりゃいいのに、っていうのが多いですよ。そこを突破しなきゃいけない。

突破するためには 僕はもう生活するしかないと思ったんで、 移住しました。

生活感のある表現をしたかったんで、そのために、まずは住んだ。住んだら、コミュニティと生活しなきゃいけないんですよ。ドブ掃除したり、運動会出たりとか、町の暮らしの中に入っていくかきやいけないんですね。そこで行われていること、祭りとかに

まず参加していくこと

だと思えますよね。そこから気づきが出てはじめて、自分はこの考えがあるけどって、はじめて仲間づくりができる。

道田：僕らは「通うまちづくり」なんです。最初行き始めたころは「なんやお前ら」って、今もあると思いますけど、そんな雰囲気満々でした。ただ諦めずに回数重ねていると「また来たんかいな」とか「まだいのかいな」「みたいな話になってきて、だんだん話してくると相談事が持ち込まれるようになってきたり、キッカケが増えてくるんです。ただなかなか住むのは難しい。

花井：僕らの町も、住んだタイプと、通うタイプがいるんですよ。それは重要で、僕は住んでいるので、今度は「外から目線」というのがだいぶ減っているんです。外の出身なのでずっと住んでいる人とはちょっと違う感覚は持っていますけど、これは小布施の人に言われたんですが

「いつも風を運んでくる人間が必要なんだ」



と。そういう役目があると思うんで、それはいいと思うんです。

並河：その言ってもおぼえるど勇氣付けられます。ずっとやっていて、町づくりってやっぱり主役は町の人たちだって絶対思っていて、そこを突きつめて行くど自分の意味ってなんだろうって考えたりするんですけど、町の人は町の中を見て、町のことを誰よりも思っていると思います。でもさっき風って仰っていましたけど、そういう気持ちで、自分が外にいて高浜町に行っている意味っていろいろがあるのかなって思ったりするんですが、逆に何か、皆さんの中で町の外側の人たちがいるから、こういうものにつながつたとか、町の外側の人たちについてどう考えているか、ちょっと質問したいんですけど。

西原：由布院も、昔から各方面で頑張っている人たちを呼んできて、いるんなことを勉強してきたという流れが今もあります。というのも、由布院には高校も大学もないので、下手したら由布院から全く出ない人もいれば、出てそのまま帰ってこない人もいます。色んな人がいる中で議論をすると絶対にまとまらなかつたりするんです。で、そういう部分を、外の人がやって来て中の人たちの話を聞いて、「じゃあこういうことをしたらどうですか」とって、まとめてくださる人がすごく大切です。そういう人達が新しい提案をしてくれて、じゃあ今度そういう形をやってみようかというふうな町が動いていく。私たちが若い世代と飲み会で議論をしても答えなんて見つからない、絶対にまとまらないんです。けど、そういう中にポンと外部の人が飲み会に入ってその議論をただ聞いてくれて、最後に「みんなそれぞれ町のが大好きで、その思いを持って議論しているんだから、それは非常に大事なことだ」と言ってくれるだけで落ち着きます。ただそれをどこに落とし込んでいくのかは、

でレンズを中心にしようとしているんです。鯖江の老舗メーカーがどんどん潰れてるのは、自分らが誇る技術を中国の、安い人件費のほうに簡単に持っていったからです。僕らは逆に、メガネが好きだからメガネをやりたい、という文化に変えていかないと。だから、地場産業が生き残っていくには、自分の県が好きであること。それからそれを飯のタネにしないということ。

**お金のにおいをさせちゃうと、
誰も付いてきてくれへんのですわ、
無我無心でやる、好きであるということ。**

僕はそう思っています。

道田：確かに。その町のことを本当に好きにならないと、いいデザインは生まれにくいし、いい言葉も添えられないし、何より情熱が湧かないとやる気がおこらないです。浜田さん、ブランディングってという言葉がさっき出てましたが、メガネをカッコ良くするために、どういうことをやられているんですか。

浜田：10年前、福井に来た時は、鯖江をモノづくりとしては見ていましたけど、鯖江の人とは一切関わりを持ちませんでした。まず何をしようとしたかという点、

**東京でカッコいいブランドだと
認められるのが先決**

だと思っただんです。で、エグザイルさんや所さんがかけているとか、東京で認められているブランド会社の社長や、そういうところから鯖江に入っていくと、彼らは簡単に認めてくれる。その辺が、悲しいかな、地方でのブランディングのある実態です。そこで僕は三年

**町に住んでいる人と
落とし所を見つけていく、
そういうことを外部の人が教えてくれる**

なあと。

並河：鯖江のメガネづくりのほうで、地場産業と町の人たちとの関わりがどう相乗効果になっているかとか、その辺りをうかがえたらなと思います。

諸井：福井県でメガネをやっているっていうのは、地場産業だからっていうのは確かにあっているんですけど、悲しいかな、百年以上経っちゃったら、

メガネは仕事になっちゃったん

ですね。飯を食うタネなんです。メガネ産業が105年続いたきたルーツっていうのは何かと考えた時に、メガネが飯を食うための道具になるということでスタートした、っていうのは間違いないんです。出稼ぎ農家を抑えるために、1005年にメガネを納屋で作りました、うといって始めたんです。浜田君と私がやるうと思っっているのは、

メガネを文化にしよう

と思っっています。メガネ好きだからメガネを作りたい。でも、鯖江ではメガネを作るのがカッコ悪いんですよ。あの写真を見て、カッコイイでしょ。ああやってヤスリでやっているのは、もうごく一部の人ですけれど。その姿を見ている息子さんたちはカッコ悪いと思っっているんです。鯖江では、メガネを作っている親父はカッコイイはずなのに。

それを浜田君は、カッコイイ道具にしようと、私はレンズ屋なのほど前から、鯖江でモノづくりをしているっていうのが大前提の会社ですから、こういう土地ですとか、こういう集まりがありますとか、そういうところに意識的に出るようにして、鯖江に恩返しをする活動をしています。

平本：結局、地元が受け入れる時に、どういったキッカケを作るかっていうことだと思っいます。浜田さんの場合は東京で認められるとか、著名人が使うということであった。ただ全部が全部、東京に持つてくればいいわけじゃなくて、地元で共有することが大事だとか、熱い人を集めるとか、やり方の一つとして、東京っていうのはたぶんお手伝いができるのかなあという気がします。

ただ我々が最近懸念しているのは、浜田さんみたいに自分が誇れる物を持って来られる方がいいですけど、けっこう地方自治体の観光、食の方が東京に來られて、新丸ビルでプロモーションしたいとか多いんです。知事が来て、有名人とトークして、で2週間やって、いるんなお店でメニューを出して、ハイ終わり。そのあと何も残らない。東京にも何も残らないし、地元でフィードバックするってこともやらない。たまたま鯖江は、浜田さんが

地元を持って帰るっていうものがあつた

からこそ、そういうことができているので、やっぱりそこまできちんと仕掛けるために

東京をどう使うか

、っていう。戦術を個人だつたり、地元の行政の方がどんどんやって頂きたいなつて感じます。

道田：浜田さんみたいなパイ役必要ですね。高浜の人に、「まちづくり会議は高浜でやらないんですか」と言われました(笑)。高浜でやると高浜だけの問題になるんで、来てもらうパネラーにも



持ち帰ってもらうものが少ないかもしれない。同じ中身の話をするのなら、

東京ってこういう一番ニュートリアルな場所

がふさわしいと思っただけです。

小松…こういう場所もそうなんですけど、いろんな方がいろんな情報をくたさるんですね。それはすごく大切なんですけど、

この情報をご自身なりに どう編集するかというのがポイント

で、持ち帰る時も自分なりの問題意識がないと、こういう情報は、価値がぐっと落ちちゃうんですね。だから事前に自分なりの意識っていうのはすごく重要だと思います。

それと、

一定の志を持たれている方の集まり

じゃないと。行政の方はよく、データベースとマッチングっていう言葉をみなさん使ってますね。人のデータベースを作りました、マッチングの場を作りました。で、こういう場所もそのために使いますと。いいんですけど、そこで終わっちゃうんですね。

モノっていうのは一定の意識を持ってないと、意図を持って集めて編集するくらいは貪欲さがないと意味がないじゃないですか。そういう集まりをつくっていかないと宝の持ち腐れの建物が増えてしまっし、予算も残念ながら単年度で切れる予算と報告書の山が最後はつんどくになります。

情報が交差しない。

し町おこしをおきたい。しかし大きい漁港を持つ港町は動いてくれない。でも、よくよく考えたら南部せんべいというのはものすごく奥が深いことがわかってきた。それなら、明治時代からのせんべい屋さんで細々とやっているこの人たちならやってくれるんじゃないかと。

で、その団体にお知らせを出したんです。2カ月、うんともすんとも何にもないです。で、条件を出しました。二人分の旅費を持ちます。でもイベントやるには足りないですから、こっちで応援のアルバイトを二人付けます。うんともすんとも来ません。もう仕事どころじゃないわけです。結局どうしたかというと、札幌で頼をひっぱたく以外ないんですよ。これだったら来てくるっていう条件をさらに上積みしたんです。これはイベントとか商売をする上で、一番へたくそなパターンだと思うんですけど。私たちもやらなければいけないので。お金はあとで考えようと。最終的には10団体揃いました。さっきギブ&ギブって言いましたけど、せっかく来てくれたお客様に楽しんでもらう、集まった全国の団体の人たちに

八戸を好きになってもらおうと、 ありとあらゆることをやりました。

結果としてイベントは成功したんですが、ある女性が「まだ帰らない」と言ってくれたんです。八戸を好きになってくれたんだと思えます。

平本…今のところで、来てくれた人達に気に入ってもらうためにありとあらゆることをやって仰っていましたけど、具体的にどんなことをやったのかそこが気になります。

のかた…私なりの、ありとあらゆることっていう解釈は、

すぐ隣にいい情報があるのに、 それにも気付かない。

それを編集する人の役割が非常に重要なことだと思います。

のかた…一つ質問します。東京で認められる、メディアに取り上げてもらっているのは、イベントを成功させる上で非常に重要だということを全国の町づくりの方から聞いています。しかしあえて、八戸はせんべい汁というものがまだまだ知られてない時代に、地元でやらなければダメだということで、八戸でB1グルメの祭典を行いました。地元開催の苦勞もあつたかと思いますが、

東京ではなく 地元で開催したからこそよかった

なあと思われれることはどういうことでしょうか。

田村…まずやろうと。で、資金援助はどこにもない。ただ、何かの助成金の申請について得意な人間がいて、そこから少し、うまくいけばお金がもらえそうだなということがあって。八食センターという大きい市場があるんですけど、そこに100坪くらいの催事場がありまして、たまたま私がその専務理事と懇意にしていたものから、場所をタダで貸してください、いろんな設備、ガス、水道も一緒に、チラシも出してくださいって、おそろおそろお願いしたんです。なんとかお金のメドが立つんじゃないかと。立つたんじゃないんですよ、立つんじゃないかと。もうやるべ。

とにかくやりたい意志のほつが強かった

わけですよ。なぜかというところ、これから新幹線が来た時に、もう少

人のもてなし、それに尽きる

のではないかと思います。青森には仕事で何度も行っていたのですが、八戸ははつきり言って通過地点でした。なんで八戸がああB1、1グランプリの発祥の地なんだろうというのもあって、あと南部せんべいといえば盛岡が有名なのに、なんで八戸なんだろうというのもありまして、それで八戸に取材でお邪魔したんです。田村さんは最初の電話の時からも熱い、あつたかい方で、町づくりをしている方を紹介してほしいと頼むと、水族館の館長さん、せんべいを焼いているお父さん、研究所を立ち上げた木村さんを紹介してくださいました。夜の飲み会に木村さんが来られて、「朝起きたら銭湯いきなよ、その前に朝市行きなよ」という話になり、翌朝迎えに来て頂いて、朝市にご飯をいただいたあとに、温泉銭湯に入って、その後、取材したいなら、ということで隣町十和田の方が、僕たちミナールの方に会わせてくれて。またそこで十和田の方が、僕たちも八戸がいるから今の僕たちがいるんだということで、お互いに交流し合っ、それが青森の魅力につながることを感じた。とにかく朝から晩まで、自分たちが住んでいる町、いいところも悪いところも全部見せて、それをみんなに知ってもらった上でまた来てねって。私はいつも思うのは、町も素敵ですけど、

そこに住んでいる人が素敵、 だからもう一回行きたい、 また違う季節にあの人に会いたい

思えます。

小松…のかたさんの話に絡むのですが、ギブ&ギブっていうのは一つポイントかなと思います。ギブ&ギブの裏には、



儲けを先に考えるか、自分たちの気持ちを知らせてもらいたいのか、

どっちが先に出るかによって、全く変わります。従来型の観光地の悪いところは「どうせ今日来る人は二度と来ないだろうから、とりあえず」というような発想ですね。中にはそういうところ以外からお店を出して、ブランド価値を横取りするような人たちも現われます。でもそこで色分けがどうしても付いてくるのは、ギブ&ギブの精神がどこまであるのか、それが純粋に伝わるかどうか、相手がその地域を好きになるかどうかです。

花井：小布施が今あるのは、30年ぐらい前、修景事業っていう町並みを修景したことや、北斎館ができた、栗屋さんとかいるんな商業チームががんばってきたことに始まるわけです。その二代目、三代目とかが継ぐときには、小布施ではもう基盤ができていますから、そこに乗っかればいいんですよ。でもそこに乗っかるのに、まちの時間軸に乗っかってないんですよ。ただ単にそこに出来上がったものに乗っかってるから、そういうことが10代20代30代の人たちには見えないような気がします。結果的に観光地になっただけであって、生きようとしているものがないか、まだ身になっていないというかね。でも私なんかは命がけで引越したわけです(笑)。ここで認められなかったら、もう行くところないな、そういう気持ちでいるので、やっぱり大好きになってるし、みんなと一緒に何かやりたいと思う時の、たまに必死さがずれちゃう時がある。でもそうじゃない人たちも出てきているから、

そこを一緒に結んで、紡いでいく、

そうじゃないと次の小布施はない。

との交流は一切ない中で、隣の人たちとの戦いの中で生まれた町づくりっていうのがたとえば新潟県の村上なんかでは行われていて、それは大成功しているという例があります。

花井：立地というのは意味があつて、小布施町は城下町じゃなくて、交流のある貿易の町だったんですね。そこでモノを引き入れるっていうのが凄くて、さっき高野さんが言ったように、よそ者が好きだったというのは、情報収集していたっていうのはよく言われていますね。

西原(慎)：先ほどから、人をどういう風に引き込んでいったらいいかっていう話が出てますけど、

私は引き込まれた方

なんです。町の中に仕事し出すだよ、というのがあり、私はまあモノをつくるのが得意なんで、たとえば映画祭の看板とか、設置とか手伝っていたんですけど、そういう自分の得意分野を取り組みの中で活かしていくっていうのが必要であつて、それをやると周りのひとがベタぼめしてくれるんです。

ほめられればほめられるほど、町の中に出ていきたくなる。

これが多分、私が経験した「引き込まれる」ということです。

小松：最後は

町づくりは人づくり

です。人をつくるにはどうしたらいいかっていう時に、今、西原さんが自分の得意技って言って下さったのがポイントですね。

道田：おふせくりちゃん、

ネットの時代であれだけ手間暇かけて、ちゃんと人に対して心を返していく

こと、あのマメさってすごいなって思ってます。それを行政の人がやっているっていうことがすごいなと感じるんですけど、もてなしの原点は小布施のどこにあるのかっていうのが気になるんですが。

高野：共通しているのは、やっぱり

信用や信頼は、会話や対話

だと思えますよね。おふせくりちゃんだけで言えば、ギブギブ・ギブ：という感じがします。小布施の人って、外から来る人が好きなんです。さっき館長がよそ者って言いましたけど、

よそ者を受け入れる気質がある

んです。来た人に対して、ありがとう、また来てくださっていうところをとかいう。それがおふせくりちゃんと小布施町に共通しているんじゃないかなと思います。

のかた：

町の立地もすごく大きい

と思います。私や花井館長の出身の福岡県は港町なので、外からの人を受け入れる環境に慣れている。そういうこともあり福岡ではイベントがけっこう盛んだと思うし、八戸や高浜も海の町なのでお祭り大好きとか、あると思います。由布院はまだ閉鎖的な町から、別府みたいに有名になりたいとか、知ってほしいとか、そういう思いから始まったっていうのもあるし。城下町だとあまりに閉鎖的で外

西原：由布院ってすごくありがたいことに、それぞれの得意分野を持った人たちがずっといて、中谷健太郎さんとか溝口薫平さんとか、本を書くのが得意だったから、自分たちがどういう町づくりをしたかっていうのを本にして残してくれています。さっき町づくりは駅伝だって仰っていましたけど、中谷さんはまさに、「たすきがけの湯布院」っていう本を残してくださっています。由布院の観光協会が新聞を出しているんですけど、「あの時の決断」っていうのを先月から掲載していて、昭和50年頃からの協会長がどういう決断をしたかっていうのを、自分たちで残していこうとしています。身に余る資料がほんとに沢山残されているのが、ありがたい。

並河：高浜町では、この前古民家を改装して、「青の里ゆくり荘」という名前になりました。そういう場所があると、そこで近所の漁師さんが猪鍋をふるまってくれたり、農家の人がおにぎりを持ってきてくれたり、お医者さんが体にいいお茶を持ってきてくれたりとか、そういうもてなしを受けられて、これすごくいいなあと。可能性があると、場所があるからみんなの力が集まって何かを突破できたのかなっていう感じがしました。

花井：小布施だと、僕は入ってないんですけど、消防団っていうのがあって。これも小さな町では大事なたまり場で、もう一つ商工会の青年部、お祭りになると必ず何かやってくれるし、手が足りない時はぜひ助けてくれます。

*＊会場より、質問＊＊

町づくりに関わるうとする人はやっぱり商売に関わっている人が多い気がしています。ただ町に住んでいる人っていうのはサラリーマンとかが多くて、傍観者になりがちになっている。そういう



**傍観者を巻き込んでいく上で
ご苦労されている**

こととか、コツがあれば披露して頂きたいと思います。

田村：何度か今日、巻き込むとかいう言葉が出てきているじゃないですか。何か楽しそうなことを常に発信してきている、今現在は「入ってくれよ」という言い方は一切してないんです。実は先月、せんべい汁研究所の東京サポータークラブというのが50名くらいで立ち上がりました。なんにも頼んでないんですよ。ただイベントがあった時に応援に来てくれて楽しかったと。そしたらいつの間にか、立ち上げましたって。会則まで全部つくっちゃって。多分何か、私たちがやっていることに魅力があるんでしょうね。どうですか？

中島：何か楽しそうらしいですね（笑）。やりましようという活動はしてないです。誘ってもイヤイヤだったら続かないし、そこにその人も居つらと思うんですよ。私たちの団体はそれこそ色々な職業の方がいます。きっと楽しそうな姿を見て、

あ、と思った方はきっと仲間になる

んじゃないかなと。ただそれは、一年や二年の話ではないのだと思います。

道田：外から来ている私たちも、地元の人がやりたいことに火を付けたら、様々な面で手助けができると思ってます。そのためには、やっぱり人の話を聞かなきゃいけないなっていうのをすごく感じます。ずっと話を聞いていると、必ずその人のやりたいことって出てきます。